

大和国西大寺与秋篠寺相論絵図模写

村岡 ゆかり

一九九四年九月から一九九五年七月にかけて東京大学文学部所蔵の大和国西大寺与秋篠寺相論絵図の模写を行った。

今回の報告で注目すべき点は、少ない基本色による重ね塗りで色調に変化をもたせた彩色方法の推定と、原本が重要文化財でありその保護を第一に考えたため、以前報告した方法とは違う模写を行ったことである。

一、原本と模写製作

(1) 原本観察

所蔵／東京大学文学部

紙／和紙（おそらく楮系の紙だと思われる。）

顔料／墨・黄土・藍・朱

一見、何色も使っているように見えるが、詳細に観察すると、重ね塗りを行っているのが分かる。おそらくこの四種類の色の組み合わせで色数を表現していたのだろうと思われる。(図1、

図2参照)

表装形態／巻物仕立て⁽¹⁾

原本の状態／シミ・虫喰い・折れ筋は見られるものの、保存状態は

良好であると思われる。

(2) 原本の作成手順の推定

付箋あり。裏書きあり。

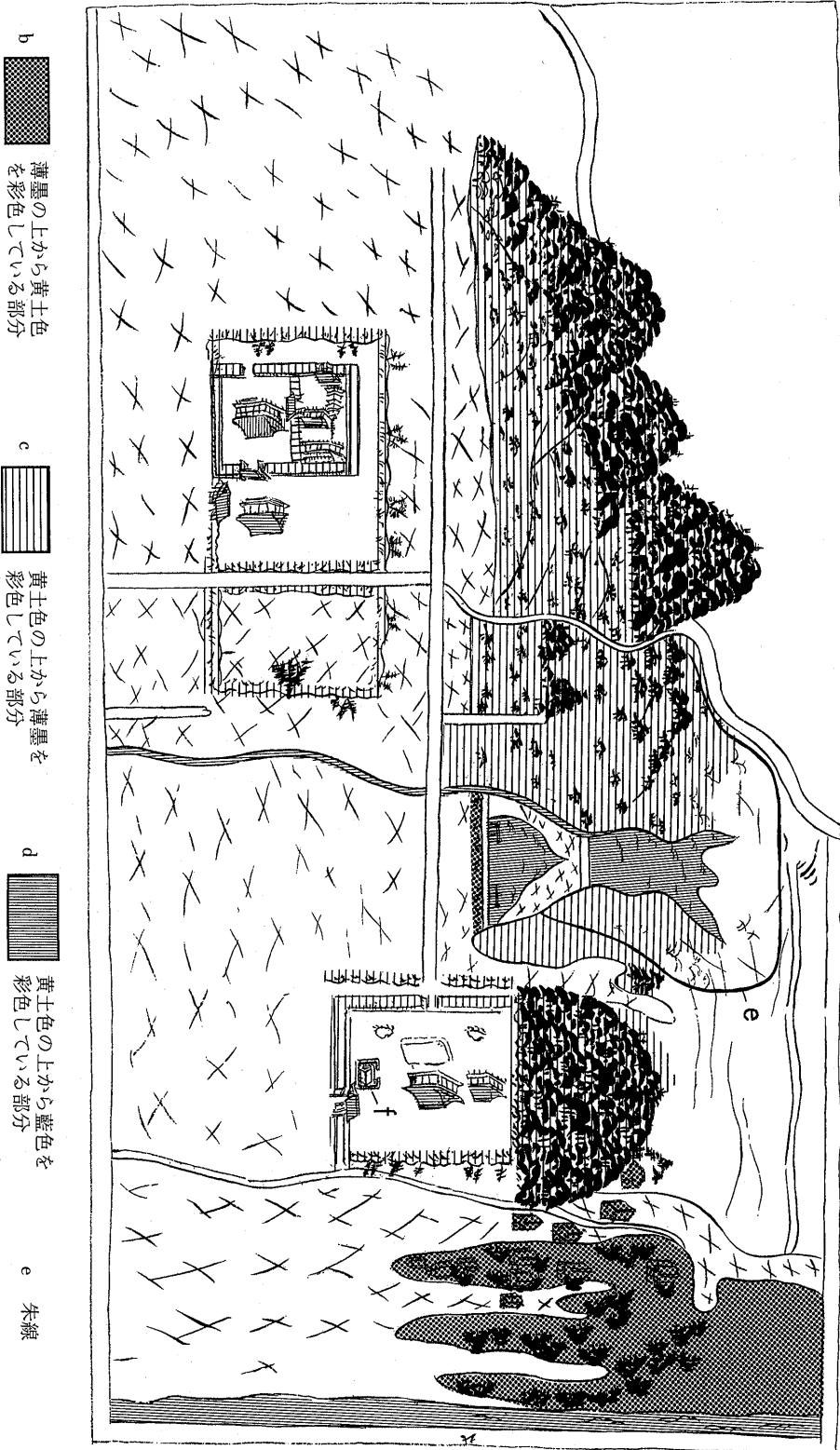
彩色が施されていることから、髹水を引いてあると思われる。その髹水を引いた和紙の上に、墨で寺・道・池・川・山・樹木・家などの線を描いていく。(図2)のbで示した箇所を、薄墨で濃淡を使って色分けをしながら塗る。次に、(図1)のaで示した箇所を黄土で塗っていく。このとき黄土はべったりと均一に塗るのではなく、むらを出しながら塗ったと思われる。続いて、山とその周辺・西大寺秋篠寺双方のかこいの部分に薄墨を塗り(図2)のc)、川・池・建物の屋根に藍を塗る(図2)のd)。ただし、(図2)にある秋篠寺内記号fの屋根の色彩は、薄墨の下地に薄い朱色を重ねたものだろうと思われる。続いて、朱線を描き(図2)の記号e)、樹木や線などの墨で描かれたところを部分的に描き起こし、最後に文字を書き込む。そして、付箋を貼り付けたのだと思われる。




(3) 模写の手順

▽原本を手元に置くことが出来ないため、模写を行う前に原本を詳細に観察する。その際に、あらかじめ色カードを作っておき、原本を観察しながらこの色カードを使って色合わせを行う。

▽付箋を取った状態で撮影した原本のモノクロ写真を原寸大に引き伸

〔図1〕



- b  薄墨の上から黄土色を彩色している部分
- c  黄土色の上から薄墨を彩色している部分
- d  黄土色の上から藍色を彩色している部分
- e 朱練

【图 2】



ばし、その上に髹水を施した和紙を置き、上げ写しを行う。

▽上げ写し完了後、もう一度和紙に薄い髹水を引く。

▽裏打ちをした後、仮張りにはる。(本所技術官中藤靖之氏による)

▽色カード・印刷本⁽³⁾・モノクロ写真を参考にしながら彩色を行う。

彩色の手順は、(2)の原本の作成手順の推定に従って作業した。ただし、顔料に関しては、当時の顔料とまったく同じものを手に入れるのは不可能なことから、年月の経過による汚れで顔料の色が変化していることから、原本の色に近づけるために、墨・黄土・藍・朱の四種類以外も使用した。(4)の顔料の項目を参照)

▽彩色修了後、古色付けを行い全体を整える。

(4) 顔料

樹木・文字・線：墨(松煙墨)

〔図1〕

a…黄土(中口)、黄土、朱土、岱赭

〔図2〕

b…薄墨(松煙墨)、朱土、黄土、黄土(中口)、岱赭

c…薄墨(松煙墨)、黄土、黄土(中口)

d…藍、黄土(中口)、黄土

e…辰砂(白)

f…堀/黄土、薄墨(松煙墨)

屋根/薄墨(松煙墨)、辰砂(白)

二、材料

和紙/楮紙(楮一〇〇%、pH値七・三、紙舗「直」製)

顔料/墨・黄土・黄土(中口)・朱土・岱赭・藍・辰砂(白)

接着剤/三千本膠(二〇〇ccの水に対して三千本膠一本の割合の水溶

液)

筆/水筆・彩色筆

三、製作を終えて

史料編纂所における模写で、原本が手元に無く、様々な資料を使いながら作業するということは、おそらく初めての試みであったと思われる。しかしその結果は、今までの模写とは違い、筆勢・色調や塗りむらなどの細かい点で原本とは違う印象の作品になってしまった。その、彩色の面では、印刷物等を参考にしながら行ったため、どうしても原本に近い色には仕上がらなかったため、特に、〔図2〕のbは印刷では赤っぽく見えるため、朱土や岱赭を多用してしまったが、原本はもっと黄色味を帯びている。

しかし、原本が手元に無く、様々な資料を使いながら作業するケースの模写はどうしても限界が存在し、製作者の目が資料である写真に慣れなくては原本の雰囲気から離れてしまうことがあるのである。

現在では原本を借りて手元に置きながら模写をするということが非常に困難になってきているため、他の機関でも写真・色カード等の資料を用いながら模写をする方法が多く取り入れられている。

史料編纂所でも、これからはこのような模写が主流になっていくのかもしれない。

〔注〕

(1) 東京大学文学部に所蔵されている西大寺関係の絵図九点の修理を本所技術官中藤靖之氏が行った。一九七六年七月三十日に修理完了。本図はその内の一点である。

(2) 原本に使用されている基本となる色を約三×八cm程の大きさの和紙に着色

し、約八×十二cm程の大きさの厚紙の貼り込んだ物をいう。

これを原本の彩色と照らし合わせ、パステルを使ってカードの着色した部分に塗り重ねて原本の色に近づくようにしていく。

模写の作業で、原本が手元になく、写真や印刷を参考にしながら彩色をするときに、できるだけ原本に近い色にするための資料となるものである。

(3) 『大和国西大寺与秋篠寺相論絵図』四四ページ(荘園絵図聚影 三 近畿

二) 東京大学史料編纂所編)